

悪魔には悪魔を

墓地は島の高台にあった。人の足で踏み固められた坂道をえんえん十分以上も上りつづけ、ようやくたどりつく。だがそれだけに、島とそれを取り囲む海が一望できた。

数えきれないほどの島が紺碧の海に浮かび、そのはざまを白い航跡をひく船が何艘もいきかっている。

墓地を管理する寺はとうに無住となっていたが、手入れをする者がいるらしく、荒れ果ててはいない。

坂道運びあげたバケツの水で墓石を洗い、男は両手をあわせた。ツクツクボウシの音が、汗で濡れた背中に降ってくる。

眠っているのは八歳のときに亡くなった両親だった。墓参りは、二十年前日本を離れる前にしたのが最後だ。

空になったバケツにひしゃくを戻し、男は墓地を離れた。小さくて何も無い島だ。バケツは坂

道のふもとにあるよろず屋で借りた。

かつては駄菓子もおき、島の子供のたまり場だったのが、店先に人影もない。店の裏手にある井戸場にバケツを返し、男はポケットを探った。

「せんこう百円」と書かれた木箱があるが、線香は初めから入っていないかった。が、バケツと水を借りた。百円玉を木箱のかたわらにおいた。

店をやっていたのは二十年前でもかかなりの老婆ひとりだった。生きていたら、百歳近いだろう。息を吐き、男は渡船を降りた船着き場に向かった。渡船は小豆島とこの島をわずか七分で結んでいる。

船着き場で五分ほど待つと、渡船がやってきた。十人も乗れば満員の小舟にベンチが固定されている。船頭は寡黙な爺さんで、それが男にはありがたかった。

渡船は男ひとりを乗せて、船着き場を離れた。短い航海の最中、あたりを見回していた男の目を光が射た。

沖に浮かぶモーターボートだった。双眼鏡のレンズが太陽を反射したのだ。この渡船を観察している。

男は顔をそむけた。監視されていることに最初に気づいたのはきのうだ。小豆島に渡るフェリーに乗るために姫路で新幹線を降りたときから視線を感じた。視線はホーム、改札口の外とつづいた。ひとりではなく複数の男たちに尾行されていた。

思いあたる理由がまるでないわけではない。が、いくら何でもおおげさだと思った。二十年前に男が犯した罪のためだとすれば、しつこすぎる。そこまで日本の警察が暇だとも思えない。

視線を戻すと、モーターボートが走りだしたところだった。たった今、男が離れた島へと向かっていく。いったい何を調べているのか。

小豆島に渡船が着いた。小豆島で少しのんびりしようと思っていたが、男の気持はかわった。

姫路へと戻る、最も早いフェリーの切符を求めた。それでも一時間後だという。四国に向かう便もあったが、あえて行きと同ルートを使うことにした。

逃げ隠れしていると思われるなら、すればいい。逮捕されても刑務所行きにはならないだろうし、たとえなつたとしても困る人間はいない。

両親の死後、男と兄の二人は高松に住む叔母夫婦にひきとられた。叔母はやさしかったが、叔父には好かれなかった。新しい家族に兄はすぐに馴染み、学校の成績もよかった。一方の自分は、問題ばかり起こす悪ガキだった。

「良ちゃんりょうちゃんはほんと、名前の通りいい子なのに、しょう将ちゃんときたら、どうしてこうなんだろうね」

叔母はよくため息をついていた。双子は性格が似るといいうが、自分と兄はまるで似ていなかった。単細胞で喧嘩早い自分に比べ、兄は慎重な性格で、高校に入る頃は体つきも異なっていた。日焼けし、がっちりしていた自分と色白で細身の兄は、顔こそそっくりだったが、見まぢがえられることはなかった。

「本当に将は大飯食らいやな。大学いかんと体使うて働くんが向いてるやろ」

「お代わり」を連発する自分に、晩酌する叔父が苦い口調で吐きだしたのを覚えている。

大学にいくどころか、結局、高校を卒業することもなかった。三年生の秋に起きた事件をきっかけに、男は家をでた。高松を離れ、神戸に向かった。神戸から大阪へと流れ、組の盃こそもらわなかったが、喧嘩の腕前で名前を売った。

思い返せば、本当に馬鹿だった。だが馬鹿をやらなければアメリカに渡ることもなかったし、その後の人生もなかった。といつても、アメリカでも馬鹿をくり返し、刑務所行きをまぬがれようと、軍隊に飛びこんだだけだが。

が、その軍隊でようやく目が覚めた。腕つぶしで世の中を渡っていくことなどできない。いくら鍛え強くなっても上には上がいるし、頂点に立てたとしてもその期間は短い。若くて無鉄砲な奴らが追い落としにやってくる。

アメリカ陸軍に入隊したのは、つるんでいた韓国系アメリカ人の勧めだった。警察に目をつけられている、逮捕されるのは時間の問題で、逮捕され強制送還になるならいいが刑務所に送られたら最悪だ。東洋人は体つきが華奢きゃしゃで体毛も薄いので格好の慰みものにされる。逃れたければ陸軍を志願しろ。うまくいけば市民権ももらえる。

「九・一一」をきっかけに、自衛権の行使をうたったアメリカ合衆国はイギリスやフランス、カナダなどの国々とアフガニスタンに本拠をおくアル・カイダに攻撃を開始した。アフガニスタンへの派兵はどんどんふくれあがり、二〇〇一年の二万人から二〇一〇年には九万人規模になった。それに比例して戦死者も増えつづけ、新兵が求められていた。

今はそう簡単ではなくなったが、二〇〇〇年代の後半は、罪を逃れたり国籍を得ようと、米軍にもぐりこむ者は多かった。歩兵として訓練をうけ、アフガニスタンいきの飛行機に乗せられる。

米軍の戦死者数は多国籍（軍）中最多で、二千人を超えている。さらにそこにカウントされない民間軍事会社の人間もあわせれば三千人近い筈だ。

民間軍事会社に所属しているのは、アフガニスタンに派兵され除隊となったあと、兵隊よりはるかに高い給料につられたり、軍人以外の職業を選べない者たちだ。銃が好きで、かたときも手離したくないのだ。

男も民間軍事会社に誘われたが、返事は保留していた。

撤退する米軍兵士といれちがいに、派遣される民間軍事会社の人間は増えている。アメリカ政府は、戦死者の増加に対する批判を避けるために、傭兵を使っているのだ。傭兵もその大半がアメリカ人なのだが、米兵の戦死者には含まれない。その死がニュースになることは少なく、会社から身内に通知がいくだけだ。

そこがアメリカだった。金がすべてを支配する国だ。金で命を買い、金で命を売る。

それを学んだだけでも、アメリカに渡り、軍隊に入った意味はあった。

男は出航したフェリーの甲板のベンチにすわり、海を眺めていた。ガキの頃は、海と島だけの世界にうんざりしていた。ちがう世界にいきたくないと願っていた。

そのちがう世界から帰ってみると、この瀬戸内海が特別だったことに気づいた。平和で変化に乏しい。それがどれほど尊いかを自分は知らずにいた。

だからといって、ここには戻れない。傭兵となってアフガニスタンに帰るのも御免だ。

土埃と油と血と汗の匂いはたくさんだった。

特に油の匂いにはうんざりしていた。銃の油と装甲車の油だ。思いだすだけで吐きけがする。

サングラスをかけた男が不意に現われ、隣に腰をおろした。五十歳くらいだろうか。頭を剃り上げ、白いシャツにノータイでグレイのスーツを着けている。腹は少しだけでているが、同世代の中ではスマートなほうだろう。

「いい景色だね」

サングラスの男はいった。男は答えなかった。この景色をもっと目に焼きつけておきたい。「加納将さんだな」

気分を害したようすもなく、サングラスの男はつづけた。

「モーターボートに乗っていたのはあんたか」

男はいった。

「やはり気がついていたかね。さすがは歴戦の勇士だな」

男はサングラスの男を見ずに答えた。

「双眼鏡のレンズが光っていた。戦場じゃ格好の標的になる」

「撃たれなくてよかった」

サングラスの男は淡々といった。

男は首をふった。

「銃なんかもってない」

「もちろんわかっている。閑空についたときから見張っていたからな」

「それでもバクするんだろ」

男がいうと、サングラスの男は黙った。フェリーは刻々と進んでいく。

「それは私の仕事じゃない」

やがてサングラスの男はいった。

「刑事なんだろ。それとも管轄ちがいつて奴か。だったら俺をつけ回すな」

「確かに私は大阪府警の人間ではない。だが君にでていた傷害容疑の逮捕状は、海外出国により時効停止になっている筈だ」

「やっぱりバクするのじゃないか」

「場合によっては、大阪府警にひき渡すかもしれない」

男はサングラスの男に目を向けた。

「場合によっては？」

そして自分とサングラスの男がすわるベンチの周囲を三人の男が囲んでいることに気づいた。

服装はスーツやジーンズなどが、警察官の匂いがぶんぶんする。

「不思議だな。日本でもアメリカでもお巡りの匂いは皆同じだ」

男はいい、大きく息を吐いた。

「いいぜ、バクっても。覚悟して帰ってきたんだ。じゃなけりや墓参りになんていきやしない」

「協力をお願いしたい」

サングラスの男がいった。

「何の協力だ。日本に知り合いなんかいない。昔の仲間なんてとっくに切れてる」

「だが身内はいる。君の双子のお兄さんだ」

いって、サングラスの男はジャケットから黒革のケースをとりだした。開いて男の鼻先につきだす。金色のバッジがはまっていたが、その中心に「麻」という文字が入っている。

二つ折りのケースの上段には写真入りの身分証がおさまっていた。

「厚生労働省 司法警察員 麻薬取締官 菅下清志」

「麻薬取締官？」

男はつぶやいた。

「そうだ。アメリカのDEAと同じだと思ってもらえばいい」

菅下は答えた。

「それと良と何の関係がある？ あいつをつかまえるのか」

男が訊ねると、菅下は深々と息を吸いこんだ。

「兄さんとはずっと連絡をとっていなかったのだな」

男は顔をそむけ海を見つめた。

「家をでてから一度だけとった。十八年前だ」

「そのとき兄さんは何をしていた？」

「大学生だ。薬科大に入ったといっていた」

「その後のことは知らないのか」

「何も知らない。あいつの人生にかかわらないでいようと思った」

答えて、男は菅下を見つめた。

「答えるよ。良は何をやったんだ？ なぜつかまえる？」

菅下は無言で見返していたが、やがて海に目を向け、答えた。

「君の兄さんは我々と同じ麻薬取締官だ。潜入捜査中に連絡がとれなくなり、じきひと月になる」

2

フェリーが姫路に到着すると、菅下とともに加納将は新幹線に乗った。新大阪に向かい、新大阪駅に迎えにきていたワゴン車で大阪市中央区の谷町四丁目交差点に面する建物に運ばれた。同じ建物には、近畿厚生局麻薬取締部の他に近畿財務局や外務省大阪分室などの政府機関が入っていた。

「なるほど。ここならすぐに俺をひき渡せるな」

案内された部屋の窓から外を眺め、加納将はいった。本町通をへだて、すぐ向かいに大阪府警察本部がある。

「まあすわりなさい」

菅下はいって、丸い会議機の椅子をひいた。

加納将は腰をおろした。部屋の扉がノックされ、黒のパンツスーツを着けた若い女が、コーヒーの入った紙コップと書類ホルダーを運んできた。将には目もくれない。

「てっきり取調室だと思ったが、そうじゃないんだ」
将はいった。

「そういう設備はない。必要なら府警に借りる。ここは純粋な役所だ」

菅下は答え、じつと将を見つめた。やがて小さく首をふった。

「双子とはいえ、本当に似ているな」

「誰と？ 良と、か。そんな筈ない。あいつは俺より細かった」

将はいった。サングラスを外した菅下の目は鋭かった。背筋もまっすぐのびていて、警察官と
いうより軍人のように見える。

菅下は無言で書類ホルダーを開き、はさまれていた写真をすべらせた。

すべてスナップ写真だ。街頭やレストラン、車の運転席にいる将の姿が写っている。だが将で
はない。体つきはそっくりだが、わずかに色が白く髪も長い。

「なんだ、これ」

将は思わずつぶやいた。

「あいつ、太ったな」

「太ったのではない。大学でレスリング部に所属し、体を鍛えたんだ」

「レスリング？ あいつが」

菅下は頷き、将を見た。

「強くなりたかったのだそうだ」

将は無言だった。

「なぜ強くなりたかったのか、理由がわかるかね？」

菅下が訊ねた。

見当がつかないわけはなかった。だが、

「いいや」

と将は首をふった。菅下は小さく頷いた。

「そうか」

「あいつはいつからおま、いや麻薬取締官になったんだ？」

「大学をでてすぐだ。薬剤師の資格をとり、厚労省麻薬取締部に入った」

「薬剤師になったのに、か」

「麻薬取締官には薬剤師の資格をもつ者が多い。麻薬などの薬物を扱うのに必要だからな」

「俺が訊きたいのは、奴がなぜふうの薬剤師の道を進まなかったかだ」

菅下はホルダーをめくった。

「確か君らの叔父は、高松で薬局を経営していたのだったな。君らを八歳のときにひきとった

――
「薬局を継ぐのだと思っていた」

「その叔父さんは、十五年前に亡くなった。薬局に押しこんだ強盗に殺されたんだ。犯人は麻薬
中毒患者で、とりおさえようとして刺されたようだ」

菅下は将を見つめた。

「これで答になるかな」

「叔父さんの敵をとろうと思ったってことか」

「麻薬中毒患者をつかまえたのではなく、麻薬を作り、運び、売るような人間をつかまえた

と思ったのだそうだ」

「なるほどね」

叔父が死んだことは知らなかった。知らせようにも、連絡のつかないところに自分はいた。カリフォルニアで悪事を重ねていたのだ。陸軍を志願したときも身寄りはないと書いた。

「真面目なあいつらしい」

「加納は、進んで危険な任務をやりたがった。誰もが嫌がるようなドラッグディーラーとの接触や情報収集に率先してあたった。だからといって無鉄砲だったわけではない。麻薬取締官は単独での捜査も多い。頭が切れ勤がよくなければ、任務に失敗するし、場合によっては危険な状況におちいる。加納は優秀なマトリで根性もあった」

「マトリというのか」

菅下は頷いた。

「根性があるように見せたかったのじゃないのか」

将がいうと、菅下は目を細めた。

「どういう意味かね」

「良は本当は臆病だった。臆病な奴ほど強がる」

菅下の目に怒りが浮かんだ。

「確かに君は軍隊でさまざまな経験をしたかもしれないが、マトリをなめてもらっては困る。覚せい剤のフラッシュバックを起こし、ドスやチャカをふり回しているようなチンピラを、銃を使わずとりおさえられるかね。撃つのは簡単だ。だが撃ってしまったら、情報は得られない」

「情報？」

「君ら兵隊は敵を殺すのが仕事だ。我々は、麻薬や覚せい剤などの違法な薬物が蔓延まげんするのを防ぐのが仕事だ。そのためには容疑者を殺してしまつては何の役にも立たない」

「そうか？ 中毒してる奴らを皆殺しにすれば、話は早いだろ」

菅下はあきれたように息を吐いた。

「本気でそう思っているのか？」

「できるかどうかは別にして、そうすりゃいなくなる」

「君はクスリをやったことがあるか？」

「ないわけじゃない」

「どう感じた？」

「別に。アルコールとたいしてちがわないと思った」

「それだけか？」

「酔っぱらいは酔っぱらいにやさしい。だがジャンキーはジャンキーをカモろうとする」

「なるほど。おもしろいたとえだ」

「酒はいきなり酔ったりはしない。調整できる。だがドラッグは——」

将は指をパチンと鳴らした。

「いきなりくる。ハイになってからヤバいと思つてもどうしようもない」

「つまりコントロールできない？」

「わずかに間をおき、」

「そうだな」

と将は答えた。

「まさにヤク中が求めているのがそれだ。じよじよに酔うなんてまだるこしいことは御免だ。一瞬で、このくさくさした浮き世を忘れたい。ハイでもダウンでも、とにかくすぐに酔いたい。そういう連中がはまる。たとえ何千人を殺してもヤク中はいなくならん。なぜか。自分が酔っているだけで、他人に迷惑はかけていないと思っっているからだ。もちろんまちがっている。クスリ代欲しさに強盗をしたり、フラッシュバックでぶっ飛んで人殺しをする奴もいる。エイリアンと戦っているつもりでな」

菅下はいった。

「酒も同じだろう。酔っぱらいは喧嘩をふっかけるし、酒代欲しさに強盗をするアル中もいる。酒とドラッグのちがいは、法律で認められているかどうかだけだ」

将はからかうように答えた。

「その通りだ。だからこそクスリは莫大な利益を生む。違法薬物がこの世から消えることはない。法律が禁じてても禁じてても、次から次に新しいクスリが生まれている。それが大金になると見れば、扱う人間、組織も増える。永久に終わらない追っかけっこだ」

菅下は将の目を見つめた。

「人間に欲がある限り、いくら中毒者を殺してもなくならない」

将は肩をすくめた。

「つまり、人間がそういう生きものだってことだろう。酒だろうがドラッグだろうが、気持よく

なるためなら、何でもする」

菅下は頷いた。

「だからこそ放置はできない。麻薬組織や密売人を野放しにすれば、中毒者はただ増える一方だ」

「あんたたちは決して勝ち目のない戦争をしているってことか」

「はっきりいえばそうだ。だからこそ強い意志が必要になる」

将はしばらく黙っていたが口を開いた。

「今日より明日がよくなると思っっている人間はドラッグには手をださない。未来に何の希望もなく、この世の中はクソでしかないと思えば、ドラッグくらいしか楽しみがなくなる。学校にいきたくともいけない、働きたくとも勤め口がない、俺が知っっているジャンキーはそんな奴ばかりだった」

「君はなぜその仲間入りをしなかったんだ？」

「わからない。たぶん、いつか別の生きかたができると思っっていたからだろう。島に帰って静かに暮らすのに、ドラッグは必要ない」

「後悔しているのか？ 故郷をでていったことを」

将は菅下をにらんだ。

「そんな質問には答えない」

菅下は将を見返し、いった。

「加納は後悔していた。君が故郷をでていくのを止めなかったことを」

将は息を吸いこんだ。

「あいつには関係ない」

菅下はおだやかに、

「そうかな？」

と訊き返した。

「あいつが何を話したのかは知らないが、俺がでていったのは、俺がそうしたかったからで、頼まれたからじゃない」

将は語気を強めた。菅下は目をそらし、窓の外を見やった。

「加納は君のことを気にかけていた。君が麻薬中毒患者になっているのではないか。麻薬組織のために働くような人間になっているのではないか、とね」

「馬鹿だ」

「馬鹿は君だ。ひと言、アメリカにいて元気でやっている。軍隊にいと教えてやれば、そんな心配をしないですんだ。加納はどこかで君と会うのじゃないか、君を逮捕することになるのじゃないか、と不安を抱えて仕事をしていた。加納の大胆な捜査も、それが理由だ。その結果、加納は行方不明になった。君がもし、今どこで何をしているかを知らせてやっていたら、こうはならなかった」

「俺に責任があるってのか」

菅下は将に目を戻し、答えた。

「そうだ」

「ふざけるなっ」

将は立ちあがった。

「良がどれだけ立派な麻薬取締官かは知らないが、俺とは何の関係もない。あいつがやりたくてやっていることだ」

「すわれ。まだ話は終わっていない」

「説教する気なら、さっさと俺を大阪府警にひき渡せ。二十年以上会っていない奴の行方がわからないからって俺のせいにはされるのは御免だ」

「すわれといっている」

厳しく菅下はくり返した。

「兄貴とちがって、君はさんざん人生を遠回りしてきた人間だ。ここで十分二十分使ったところで、どうということはないだろう」

将は菅下をにらみつけた。

「話を聞いてもいいが、あとであんたを一発殴る」

菅下は首を傾げた。

「殴りたければ、そうしろ」

将は腰をおろした。

「じゃあ聞こう」

「近年、東京を中心にまったく新しい、覚せい剤の密売組織が出現し、活動している。本来覚せい剤の密売は暴力団の縄張りだ。指定広域暴力団の多くは、表向き覚せい剤を禁じているが、未

端の組員にとっては、なくてはならないシノギだ。暴力団排除条例によってどんどんさわれるシノギがなくなりつつある今、クスリの密売からは手を引けないというのが実情だ。だが、我々がつきとめた新たな組織は、SNSを使い、クスリをデリバリーすることで、暴力団とは無関係の密売網を築いている。中毒者からの依頼があると、売人はバイクや自転車で中毒者のもとにクスリを届けるが、代金はネットで決済し、ブツの引き渡しも宅配ボックスなどを利用するから互いに顔を合わせない。売人もまた同じ方法で元締めからブツを受けとっているらしく互いの素姓を知るということがない。中毒者を検挙しても、売人との連絡手段がSNSであるため、たどるのは容易ではない」

「やりようはある筈だ。ジャンキーを泳がせて、届けたブツシヤ^売を監視する」

「まったくその通りの方法を、東京のマトリがとった。が、何度やっても監視の途中で売人が姿を消してしまい、元締めに接触するところをおさえられなかった。監視がバレていたとしか考えられない」

「スパイがいるんだ」

菅下は小さく頷いた。

「スパイがいるかどうかは不明だが、取締官の面が割れていることはまちがいない。そこで東京で面の割れていない加納に、売人との接触が命じられた。接触は成功し、加納は密売組織に潜入した。それが二カ月前のことだ」

「良はブツシヤ^売をやったのか」

菅下は首をふった。

「用心棒だ」

「用心棒？」

「新たな密売組織を追いかけているのは我々だけではない。シノギを荒された暴力団も同様だ。田島組系の北島会という暴力団が、密売組織の売人をたどって元締めをつきとめようとしていた。以前使っていた売人が、北島会から新しい密売組織に鞍替えしたようだ。売人は行方不明だったが、み月前に死体で見つかった。それからひと月のあいだに、売人四人が襲われた。路上で囲まれ所持していたクスリを奪われたり、自転車やバイクに車をぶつけられた。明らかに北島会による嫌がらせだ」

「それで用心棒か。じゃあ良は、その北島会に殺されたのかもしれない」

将は険しい表情になった。

「殺されてどこかに埋められたのじゃないか」

「その可能性もあるが、密売組織のことを調べようと拉致された可能性もある。北島会には、海老名^{びな}という切れ者がいる」

菅下はいつて書類ホルダーから新たな写真をだした。面長で耳が尖り、オールバックに髪をなでつけた男が写っている。

「北島会のクスリのシノギを仕切っている。海老名なら、潰す以外のことを考える」

「潰す以外のこと？」

将は菅下を見つめた。

「北島会が最も知りたいのは、クスリの供給ルートだ。どこからどうやってクスリをもちこんで

いるのか。それが安全で確実なルートなら、そっくり自分たちのものにしようと思える筈だ」

22

「わからない。密売組織に潜入してからは正体が露見するのを防ぐため、極力、接触を避けていた。密売組織は摘発を警戒して構成員に私物の携帯電話の所持を許さず、専用の携帯を支給していた。だからメールやラインでも加納と連絡がとれなかった。用心棒をつとめている加納の姿を東京のマトリが視認していて、それが先月の八日だ。以降、加納の消息は不明だ」

将はつぶやいた。

「先月の八日なら二十四日前だ」

「考えられる可能性はふたつある。まず、密売組織に正体が露見した。次に北島会に襲われた」

菅下がいうと、

「どちらにしても殺されてる」

将はいった。

「だとすると死体が見つからないのはなぜかね。潜入捜査が発覚すれば、殺して、見せしめにするのが麻薬組織の常だ。構成員の顔を知る取締官を生かしてはおかない」

将は息を吸いこんだ。

「死体をこっそり処分したんだ」

「つまり見せしめにはしなかった？ その理由は何だ」

「マトリじゃない俺にわかるわけがない」

「その答が、さっきの君の言葉だ。スパイがいる、といったな。スパイが加納の正体を密売組織

に知らせたのだとすれば、加納の死体が見つかるのは困る」

「良が殺されたのは、スパイが正体をバラしたからだとわかってしまっ、か？」

将が訊くと菅下は頷いた。

「その通りだ」

「マトリの中にスパイがいるんだな」

「マトリとは限らない。警察官かもしれない。密売組織につながっている警察官が加納の正体を暴いた可能性もある。指紋を調べれば、麻薬取締官の身分が発覚する」

将は黙って考えていた。

「だが、殺されたと決まったわけではない。拉致され監視下におかれている可能性もある」

菅下はいった。

「何のために？」

「北島会なら覚せい剤の供給ルートを吐かせる。密売組織なら、マトリがどこまで組織の実態をつきとめているのかを知る」

将は首をふった。

「どっちにしたって一ヶ月近くもかける筈がない」

「第三の可能性もある」

「第三？」

将は菅下を見つめた。

「加納本人が自分の意志で姿を消した」

23

「何のために？」

「君がいったように麻薬取締官は決して勝ち目のない戦争をしている。君は、戦争に疲れることはなかったか？」

将は息を吐いた。

「うんざりした。今もしている」

「加納にも同じことが起こった。覚せい剤の取引には大金が動く。その大金をもたらすのは、クズのような中毒者たちだ。そんな連中をひとりでも減らそうと命がけで戦っても、決して勝ち目はない。それならいっそ、密売組織の中で上り詰め、大金を得てやろうと考えたのかもしれない」

将は首をふった。

「いったらう。良は小心者なんだ。そんな度胸がある筈ない」

「今の加納は、君の知る加納ではない。マトリとして修羅場をくぐっている」

将は菅下を見つめていたが、

「所帯は？ 良は結婚していたのか」

と訊ねた。

「いや、君と同じで独身だった。ただ——」

菅下は言葉が濁した。

「ただ何だ？」

「東京で知り合った女性と親密な関係になっていた」

「どんな女だ？」

菅下は答えず、身をのりだした。

「我々に協力するか」

「何をさせたいんだ？」

「加納の行方を探してもらいたい」

「俺が？」

「東京にいき、加納と接触があった人間に会うだけで、情報が得られる筈だ」

「つまり、良のフリをしろ、というのか」

「そうだ。君が双子の弟であることは、東京のマトリにも警察官にも知らせない。もしその中にスパイがいれば、恐慌をきたす。自分の正体を暴かれるのではないか、とな」

「バックアップは？」

「私と、信頼のおける近畿麻薬取締部の人間だけだ。東京の人間は一切信用しない」

将は首をふった。

「ずいぶんなことをさせようというんだな。良には、裏切り者が混じっていたかもしれないが東京のマトリがついていた。だが俺にはそれすらなしで、殺されたかもしれない良のフリをしろ、と」

「そうだ。加納にかわってスパイを炙りだし、密売組織の実態をつかんでもらいたい。君には加納以外の家族もない。その上、兵士として訓練を積んでいる。勲章をいくつももらっているな」

「調べたのか」

「DEAにいる知り合いを通じてアメリカ陸軍に問い合わせた。君が歴戦の勇士だとお墨つきが
でた。必要なら、素手でも人を殺せると」

「殺せるかもしれないが、人殺しが好きなわけじゃない」

将は菅下をにらんだ。菅下は動じるようすもなく、いった。

「加納の消息をつきとめられるのは君だけだ」

将は深々と息を吸いこんだ。

「引き受けてくれるなら、最大限のバックアップはする。東京での君の行動は、麻薬取締官の捜
査活動に準ずるものとして、法的な責任を問われない。活動資金も提供する、ただしあくまでも
秘密は守ってもらう」

「武器は？ 銃はもてるのか」

菅下は首をふった。

「それは無理だ。加納も丸腰だった」

将は考え、いった。

「つまりあんたは、身内のスパイをこっそりつきとめたいってわけだ。そうだろうか？」

「麻薬取締部にスパイがいる可能性は否定できない」

無表情に菅下は答えた。

「スパイがわかっただろうか？ 黙ってクビにするのか？ それとも——」

「君が知る必要はない」

「だがそのせいで良が殺されたのだとしたら、放ってはおけない」

菅下は冷ややかな目を将に向けた。

「ここだけの話、それを君がするというのなら、あえて止めはしない。密売組織に関する情報を
十分に入手してからなら」

「本気でいっているのか」

「私は変わり者だ」

菅下は答えた。

「俺に良のフリをさせるのも、あんたのアイデアか」

「そうだ。裏切り者は決して許さない」

将は菅下を見つめた。

「良が裏切り者だったら？ そのときはどうする？」

菅下はすぐには答えず、将を見つめ返した。やがていった。

「そのときは、私に任せてもらいたい」

将は目をそらした。窓から見える大阪府警の建物に視線を注いだ。

「どちらを選ぶ？ あそこにいくか、東京に行くか」

菅下が訊ねた。

3

近畿麻薬取締部をでた将は、新大阪から新幹線で名古屋に移動した。その夜遅く、名古屋駅発

の高速バスに乗りこみ、翌早朝に新宿に到着した。

夜は明けていたが、まだ六時前だった。新宿駅からJRに乗った将は池袋に向かった。池袋駅西口をでると徒歩で北に向かう。池袋にくるのは初めてだったが、菅下から渡されたスマートフォン地図アプリのおかげで道に迷うことはなかった。将自身の携帯はずっと電池切れのままスーツケースの中だ。

「慶州大酒店」という看板をかかげたビルの前で将は立ち止まった。名前こそ豪華だが、古びた七階建てのビルだ。小さく「HOTEL」と記されている。紫色のガラスがはまった自動扉は、まるでラブホテルのようだ。実際、内部に入ると、「FRONT」と表示されたカウンターは客と目を合わせないような造りになっていた。

カウンターに歩みよった将は、
「シュウさんの紹介できた」

と内側の人間に告げた。無言で鍵が付きだされた。「701」と番号の入ったプラスチック板がついている。

それを手に将は小さなエレベータに乗りこんだ。内部には中国語のポスターが貼られている。どうやらルームサービスの紹介らしい。中華料理から寿司まであるようだ。

腹は減っていたが、何よりシャワーを浴び、ゆっくり寝たかった。日本に向かう飛行機からずっと、まともな睡眠をとっていない。701号室は、最上階の廊下のつきあたりにあった。キングサイズのベッドに安物の応接セットがおかれている。

スーツを脱ぎ、クローゼットにかけると将はバスルームに入った。趣味の悪い、ピンク色の椅

子がおかれていて、明らかにすわる以外の目的に使うと思^{おぼ}しい凹みがある。

それを足で押しやり、将はシャワーを浴びた。バスルームをでると、ひっぱってきたスーツケースを開いた。

軍隊の経験で、パッキングと必要最小限の荷物で移動するのは得意になった。スーツケースの中には替えの下着とジーンズ、シャツ類以外は、ほとんど私物がない。軍隊での思い出の品は勲章も含め、除隊したときにすべてサンディエゴの知り合いの家に送ったきり、とりにいっていない。今後アメリカで暮らすか日本に戻るかを決めずに、故郷を訪ねたのだった。

生活手段を考えれば、退役軍人に支援のあるアメリカで暮らす他ないだろうと思っていた。それが、菅下の出現でかわった。

良が麻薬取締官になっていたとは、まるで想像もしていなかった。

Tシャツとトランクスを着け、備え付けの小さな冷蔵庫を開けた。缶ビールとコーラが入っている。缶ビールを手に、応接セットの椅子にかけた。

かたわらに小さな窓がある。開くと一メートルとおかず、隣のビルの外壁があった。にもかかわらず、騒音とハッカクの匂いが流れこむ。

ハッカクの匂いが妙になつかしい。アメリカに渡ってしばらくサンフランシスコにいたことがあった。サンフランシスコのチャイナタウンに近いアパートで本名も出身地も知らない東南アジア人三人と共同生活を送った。

食事はいつもチャイナタウンの安いテイクアウトだった。チャイナタウンに足を踏み入れるたび、ハッカクの匂いを嗅いだ。

漢字が並んだ看板に最初は親しみを覚えたが、同居していたひとりがチャイナマフィアに殺されたのを機にそのアパートをでた。
殺された男の、仲間だけの葬儀に呼ばれ、初めてベトナム人だったことを知った。チュウといった。

ハッカクの匂いを吸いこみながらビールを飲んだ。テーブルにおいたスマートホンが小さな音をたてた。

菅下からのメールが届いたのだった。

〈港区赤坂三丁目に『ダナン』というレストランがある。そこで働く、マイという女性が加納と交際していた。接触すれば情報を得られるかもしれないが、加納の行動範囲に足を踏み入れる以上、警戒は怠るな。このメールもすぐに消せ〉

〈その女は信用できるのか?〉

将はメールを返した。

〈不明だ〉

そっけない返信だった。将は苦笑し、メールを消してスマートホンをテーブルに戻すと、缶ビールを飲み干した。ベッドに仰向けに横たわる。

大きな息を吐き、天井を見上げた。

良が生きているか死んでるか、まずはそれを確かめる。

予感めいたものは何もない。アフガニスタンの経験で、生死に関する予感ほどあてにならないものはない、と学んだ。

今度こそ生きのびられないといっていた奴が奇跡のような生還をとげ、俺は不死身だとほざいた奴が、その直後流れ弾に頭を吹き飛ばされた。

双子だから、互いの身に何かあったらわかるなんて嘘っぱちだ。二十年も離れていたら他人とかわらない。街で会っても、そうと気づかないかもしれないとまで思っていた。

それが写真を見てびっくりだ。遠く離れた地でまるでちがう時間を過ごしてきたというのに、自分でも驚くほど似ていた。

もっともそうでなければ、菅下はこんな真似をさせなかったろう。

菅下の考えはわかっている。マトリの中にいるスパイをつきとめたいのだ。自分はそのための

餌だ。
良のことは部下だと思っているかもしれないが、将の身に何があるうと眉ひとつ動かさないだろう。

それでも菅下の依頼をひきうけたのは、良がどうなったのかを知りたかったからだ。二十年会っていないかった兄がどんな奴だったのかも知りたい。

良が将の身を心配していたという菅下の言葉は、正直嬉しかった。同時に馬鹿な奴だ、とも思

った。
良は自分に負い目を感じている。その理由は、良と自分だけの秘密だ。

今となっては、どうでもいいと将は思っていたが、良にはちがったようだ。

それが理由で良が無茶をして殺されてしまったのだとしたら、菅下がいうようにひと言、近況を知らせるべきだったのか。

わからなかった。

自分のことなど忘れてくれ、と将はずっと思ってきたのに。

「馬鹿」

天井を見上げながら将はつぶやいた。

4

中国語の叫び声に、目が覚めた。腕時計をのぞくと午後四時を回っていて、将は驚いた。八時間以上、眠っていたようだ。

中国語がまた聞こえた。女の声だった。誰かを罵っているようだ。

激しい尿意を覚え、トイレに立った。

テーブルにおいていたスマートホンを手にしたが、菅下からのメールはきていなかった。

アプリで「ダナン」までの道のりを検索した。どうやら地下鉄一本でいけるようだ。東京の地下鉄はまるで迷路だから、乗り換えなしですむのはありがたい。

ジーンズをはき、Tシャツの上にダンガリーのシャツを羽織って部屋をでた。

財布の中には、当座の活動資金として渡された五十万円のうちの十万円が入っている。残りの四十万はスーツケースの中だが、盗まれる心配はしていなかった。もし盗まれたとしても、このホテルを紹介したのは菅下だ。

一階に降りると、フロントに鍵を預け、ホテルの外にでた。

地理を知るためにホテルの周囲を少し歩き回った。腹ごしらえもする。

あたりはまるでチャイナタウンだった。並んでいるのはどれも中国人の店で、客も通行人もほとんどが中国人だ。日本人のほうにはるかに少ない。

このあたりだけがそうなのか、池袋全体がチャイナタウンなのかわからなかったが、むしろ将はほっとした。初めてきた東京で「田舎者」と感じないですむ。自分もこの中国人たちと同じく異邦人だと思えるからだ。

駅の反対側にも中国人はおおぜいいた。買物にきたのか、大きなスーツケースやダンボールをくくりつけたキャリアーをひっぱっている者も多い。

池袋の東口は、西口ほど多くはないが、それでも歩いている人間の半数近くが日本人ではないようだ。

日本はいつたいつから、こんなに外国人だらけの国になってしまったのだろう。

アメリカに渡った直後、あまりに多くの国の人間がそこで暮らしていることにとまどったのを思いだす。肌の色だけではどの出身かがわからず、ましてや言葉を聞いてもさっぱりだった。

ただ英語が母国語でない国出身の人間とは、むしろコミュニケーションが楽だった。互いに使える英単語が少なく共通していたからだ。

アメリカに渡ってきた人間は皆英語を覚えようとする。そんなとき役に立ったのは、子供向けのアニメ番組だ。

ニュースやトークショー、ドラマと異なり、難しい単語が流れないし、ストーリーも単純で、登場人物が何をいっているのか想像がつく。

アメリカ人なら十歳を超えたら見ないようなアニメ番組で英語を覚えた。

この街にいる中国人も、皆日本のアニメ番組を見るのだろうか。

それはないだろう。この連中の大半は旅行者だ。日本にきて観光をし、うまいものを食い、土産を買って帰っていく。日本語など覚える必要がない。その証拠に、街のあらゆるところに、英語、中国語、ハンゲル文字の看板がでている。

八歳まで育った島に、外国人はひとりもいなかった。

大阪には、中国人と韓国人の知り合いがいた。アメリカでは自分が外国人だったが、誰も珍しからなかった。

そして今、自分はベトナム料理店を訪ねようとしている。働いているのはベトナム人だけなのか、日本人もいるのか。「マイ」とは日本人なのか。まるで見当がつかない。

ただ何人であろうと、良ときあっていたのなら日本語が話せるにちがいない。

将は地下鉄に乗りこんだ。

アプリの指示にしたがい、赤坂見附駅で地下鉄を降りる。

地上にでたのは午後六時過ぎだった。まだ明るく、むっとする暑さだ。

「ダン」は地下鉄の駅からほど近い、雑居ビルの二階にあった。エレベータではなく、外階段である仕組だ。その階段には熱帯樹の鉢植えが並んでいる。

外階段が面した道には路上駐車車の列があった。将が階段を見上げていると、そのうちの一台のドアが開き、男が二人降りたった。

将は気にとめず階段を上った。

「イラッシャイマセ」

訛りのある声がかけられた。白いシャツを着たボーイが並んだテーブルの奥にいる。色が黒く、風貌からベトナム人だろうと将は思った。

「三人様デスカ」

ボーイが訊ね、将はすぐうしろに二人の男が立っていることに気づいた。

「そうだ」

男のひとりが答えたので、将は男を見た。

ボーイが空いているテーブルのひとつを示した。半分近いテーブルが埋まっている。

答えた男はノータイでスーツを着け、髪をオールバックにしている。サラリーマンに見えなくもないが、もうひとりは小柄で目つきが悪い。顎を引き、下から将をにらみつけていた。

「何なんだ、あんたら」

「いいからすわるうや。あんたと話したくてずっと待ってたんだよ」

オールバックの男は答えた。

「知り合いか？ 俺たちは」

将は訊ねた。

「いいや。だがこれから仲よくなれるかもしれん」

将はにらんでいるもうひとりの男に目を移した。歳は三十そこそこだろう。スーツを着ていないけれど、ただのチンピラだ。

「仲よくなりたいたいようには見えないな」

「ああん？ 何だと、この野郎」

チンピラは顎をつきだした。

「よせ。下の車で待ってろ」

オールバックの男がいうと、チンピラは視線をはずした。小さく頷き、無言で店をでていく。

「これで邪魔はいなくなった。さっ」

男がうながし、将はテーブルについた。向かいに男もすわる。

「あなたの名前は？」

「小関こまぎってんだ。よろしくな、西田にしださん」

西田？と訊き返しかけ、将は言葉を呑みこんだ。良が偽名を使っていたとは菅下から聞いていない。だが麻薬組織に潜入しようというのだから、本名を名乗っていたとも思えない。

「どうして西田だと知ってるんだ」

将はいった。小関はにやりと笑った。

「そんなことはすぐにわかるさ。青山墓地で、うちの若い者をかわいがってくれたろう。すぐに調べさせた。支部長と仲よくやっているらしいじゃないか」

「支部長？」

「自転車部隊チャリコンを束ねている野郎だ。支部長と呼ばれてるんだろう。調べはついてる。それにあんた、西にしの出でだろう」

小関は将を見つめた。将は無言で見返した。

下手なことをいうと、偽者だとバレるかもしれない。

「いらっしやいませ」

黒いカバールのメニューがさしだされ、将は顔を上げた。タキシードスーツを着た、彫りの深い女が立っていた。大きな瞳は濡れたように黒く、光沢のある、キメの細かい肌をしている。

「こりゃ美人だ」

小関がつぶやいた。女は優雅に頭を下げた。

「ありがとうございます。メニューをどうぞ」

「ビールをくれや」

小関はメニューには目もくれずいった。

「ベトナムビールでよろしいでしょうか。日本とタイのビールもございますが」

「日本のビールだ」

女は将に目を移した。瞳をのぞきこみ、

「こちら様は？」

と訊ねる。意味深な視線だった。

「ジンリッキーを」

「ジンリッキーですね。承知いたしました。お料理のほうはいかがいたしましたでしょうか？」

「あとにしてくれ」

小関がいい、女はメニューをひっこめた。

「承知いたしました」

店の奥に戻っていく。将は小関とそれを見送った。

「あんた、ここがどんな店だか、知っていてきてるんだろな」
小関がいった。

「どんな店なんだ？」

将は小関を見た。

「とぼけるなよ。グエンの野郎が三日とあげず、この店にはきてるって話だ。案外、さっきの女がレコなのかもな」

「グエン？」

小関はわざとらしく目をみひらいた。

「知らないのかよ」

「ああ」

小関は首をふった。

「とぼけた野郎だな。あんたグエンとコネをつけたくてここにきてるんだろな」

「何のためにコネをつける？」

小関の目に怒りが浮かんだ。

「いい加減にしろや。素人どうしじゃねえんだ」

「オ待タセシマシタ」

トレイを手にしたボーイが現われた。ビールとジンリッキーの入ったグラスが載っている。

「さっきの姐さんはどうした？」

尖った声で小関は訊いた。

「姐サン？」

「メニユーをもってきた女だ」

「マイサンデスカ」

ボーイがいったので、将は息を吸いこんだ。

「マイってのか、あの女」

「ハイ。マイサンハマネージャードス」

「ほう。偉えんだな」

「マイサン、急用デ帰リマシタ」

ボーイはいつて、グラスをおくとテーブルを離れていった。

「残念だったな」

将はいった。

「別にどうってことはねえよ。ベトナム女に興味はねえ」

小関はビールのグラスをもちあげた。

「じゃあ、よろしくな西田さん」

「あんたはいろいろと俺のことを知っているようだが、俺はあんたのことを何も知らない。不公平じゃないか」

将はグラスを合わせた。

「別に話すようなことは何もねえよ。俺はケチなサラリーマンだ」

「サラリーマン？」

「そうさ」

小関は肩をそびやかした。

「見えねえか、サラリーマンに」

「外見は、な。中身は極道のようなだが」

「やめてくれ。今どき極道なんていったら、コーヒー一杯飲めねえぞ」

小関は首をふった。

「どっちなんだ？」

「あんたこそどっちなんだ。本当は、うちと同じで奴らのルートを狙ってる西の人なんだろう？」

西の人間だから西田って名乗ってるだけで」

「つまり偽名だと？」

「当然じゃねえか。うちの調査能力をなめるなよ。あんたみたいに腕の立つ人間のデータが何もない筈ねえ。つまり名前も何も嘘っぱちで、奴らの組織をそっくり乗っ取るのが狙いなのだろ
う」

「奴らって誰だ？」

「おい、いい加減にしねえと怒るぜ。こっちは穩便に話を進めようってのに」

小関は目を細めた。

「わかった。話を整理させてくれ。あんたはどこかのサラリーマンで奴らとやらのルートを狙っている。俺も同じサラリーマンだが、関西の会社の人間で、奴らとやらの組織を乗っ取りにきたのだとあんたは思っている」

「その通り」

「つまりあんたと俺はライバルってわけだ」

将がいうと、小関はビールをひと口飲んだ。

「そこが相談で奴だ。今どきドンパチなんざはやらねえし、一発でも音が鳴れば、デコスケどもが雪崩を打って襲いかかってくる。だから手を組まねえか。あんたはうまく奴らに入りこんだようじゃないか。俺らと手を組めば、奴らの組織をより早くいただける」

「それは狡いな」

「狡いだと？」

「だってそうだろう。俺がもしあんたのいう通りの人間なら、体を張って奴らとやらの組織に入りこんだのに、あんたは外にいて危ない橋を渡らずに、山分けしようという」

「そうかもしれねえが、こっちはうちの縄張りであんたは余所者だ。それくらいの手ハンディはし
かたない。嫌だというのなら、あんたの命が縮むだけだ。いくらあんたの腕っぷしが強くても、
人も道具もこっちが多い。それにうちの者かわいがった落とし前もある」

「それは威し
か？」

「そうじゃねえ。取引条件で奴だ。あんたは命拾いをして心強い仲間を得る。悪くないとは思わ
ないか」

小関は平然といった。

「無理な説得に聞こえるが」

「嫌ならいいんだぜ」

将はジンリッキキーを飲んだ。ジンが少なく、ほとんど炭酸水だ。

「考えさせてくれ」

「かまわねえよ。五分やる」

将は小関を見た。

「あんた、せっかちなな」

「東京ってところはそれだけものが早く動くんだ。五分で短かいなら十分やる」

声を低くして小関はつぶけた。

「いいか、下じゃさっきの野郎が待っている。ああいうちっこいのは怒ると見境がなくなるぜ」

「ちっこいのがどうしたっていうんだい」

しゃがれ声が降ってきて、将と小関はふりむいた。

ずんぐりとした体つきの女が立っていた。紺のパンツスーツを着け、男のように短かい髪をジェルで立たせている。身長は一六〇センチあるかどうかだろうが、スーツの袖や太股が筋肉ではち切れそうにふくらんでいて、まるでボディビルダーのような体つきをしていた。

小関が舌打ちした。

「オレの悪口をいってたらう」

しゃがれ声の女はいった。

「あんたの話なんかしてねえよ。この話は二、三日預けとくわ。考えておいてくれ」

いって小関は立ちあがった。

「何だい、逃げんのか」

しゃがれ声の女はいった。

「仕事があんだよ」

小関は早足で「ダナン」をでていった。フンと鼻を鳴らし、女は小関がほとんど口をつけなかつたビールのグラスを手にした。気にするようすもなく、ごくごくと飲む。

空になったグラスをテーブルに戻すと、将をにらんだ。

「何をじろじろ見てる？」

「いや、ビールが好きなんだな、とと思って」

しかたなく将はいった。

「喉が渴いでいただけだ」

女はいい、今度は将のジンリッキキーに手をのばした。

「飲まないならもうよ」

将の返事を待たず、口をつける。

「何だい、こりゃ」

ひと口飲んでいった。

「ジンリッキキーだ。かなり薄い」

「ただの炭酸水だ」

女はいって将をにらんだ。

「で、北島会の小関と何を話していた？」

「北島会。あいつは北島会の人間なのか」

「何を今さらいつてんだ」

女は首をふった。

「サラリーマンだと思ってた」

将がいうと、女の表情が険しくなった。

「とぼけるなよ。あんなカタギがいるわけないだろうが」

「そういうあんたは何だい？ 別の組の人なのか」

将は女を見つめた。年齢は同じくらいのようなのだが、正体がまるでわからない。

「株式会社桜田門さ」

「桜田門？」

女は懐から黒いケースをだした。開いてバッジと身分証をつきだす。

「警視庁、組織犯罪対策部五課のダイブツだ」

実際「大仏香緒里」と記されている。

「笑うなよ。笑ったら張り倒す」

将が口を開く前に大仏はいった。

「いい名前じゃないか。一度聞いたら忘れない」

大仏の顔が赤くなった。が、将が真顔なので、怒りを抑えたようだ。

「お前の名前は？」

大仏は訊ねた。

「西田」

将は答えた。

「本名か」

「さあ。調べるのは仕事だろう」

「生意気なことをいうじゃないか。小関と何を話していた？」

「俺に恨みがあるらしい。チャラにしてやるから手を組めといわれた」

「恨み？」

「小関の会社の人間を俺がかわいがったというんだ」

「その話か」

大仏は驚いたようすもなくいった。

「どんな話なんだ？」

「北島会のチンピラが自転車部隊の小僧を待ち伏せて、青山墓地にひっぱりこんだ。そこに男が現われ、チンピラを叩きのめしたららしい」

「チンピラの数は？」

「二人か三人」

「それをひとりでやったのか。強いんだな」

良にそんな腕つぶしがあるとは驚きだった。

「何をいつてる。自分がしたことだろうが」

「覚えがない」

「ふざけるな。被害届がでてないから調子にのつてるのか」

大仏の顔が再び赤くなった。
「いつの話だ？」
将は訊ねた。

「ひと月前だ。ひとり腕を折られた」
「詳しいな。北島会に知り合いがいるのか」
「クスリを扱ってる組なら、どこだろうと知ってる奴はいる」
平然と大仏は答え、将はその目を見つめた。
「何だい？」

大仏は訊ねた。

「いや、あなたは極道に好かれているのか嫌われているのか、どっちだろうと思ってな」
「オレのことを好いてる奴はいないね。嫌ってるか恐がつてるか、どっちかだ」

大仏は将を見返した。

「小関はお前と手を組んでどうしようというんだ？」

「いっしょに組織を乗っ取るうと誘われた」

「なるほど、小関らしい」

大仏はつぶやいた。

「小関って、どんな奴なんだ？」

「腕つぶしはからきしだが、頭が回る。北島会の海老名の懐刀さ」

海老名の名は菅下から聞いていた。

「そうなのか」

「とぼけるなよ。お前が自転車部隊の用心棒をやっていることはわかってる。見かけない顔だし極道の匂いもしないが、いったい何者だ？」

「潜入捜査官さ」

大仏の目がみひらかれた。

「マトリなのか」

「なんて、な」

将が笑うと、大仏は目を吊りあげた。

「ふざけやがって。デカをからかうと痛い目にあうぞ」

「おっかねえ」

大仏は立ちあがった。指をつきつけ、いう。

「いいか、目を離さないからな。何かあったらすぐにパクってやる。覚悟しておけ」
店をでていった。残ったのは空のグラスふたつだ。勘定は将もちになりそうだった。

5

「ダナン」をでて、あてもなく歩きだした。

良が生きているなら、どこか近くにいるような気もする。

小関に大仏と、次から次に妙な奴が現われたが、二人とも良とはこれまで話したことがなかつ

たようだ。なのに二人とも話しかけてきたのは、このひと月良の姿を見なかったからだろう。それが理由なら、二人とも良の身に何が起こったのかを知らない。良をさらったか殺したのが北島会だったら、小関はまず驚いた筈だ。同様に大仏が良の正体を暴いた汚職警官でも、将がびんびんしているのを怪しんだらう。

とはいえ小関はもちろん、大仏も信頼できるとは限らない。二人が組んでいる可能性だってある。小関が嫌っているフリをして、大仏を将に信用させようという作戦だったかもしれない。疑いだせばキリがない。もっと多くの人間から話を聞く必要があるそうだ。

赤坂には細い路地が多い。将があてもなく歩いてみると、そのうちのひとつから自転車が飛びだしてきた。レーサータイプで、またがっている奴もヘルメットをつけている。

自転車は将の目前で急停止した。うしろが尖ったヘルメットにサングラスをかけた若い男が声をあげた。

「西田さん！」

将は思わず立ち止まった。

「どこにいたんです？ ずっと捜してたんすよ！」

「俺をか？」

「あたり前じゃないすか。支部長だって心配してます」

男はサングラスを外した。まだ二十そこそこの若者だ。将を見つめる。

「体の具合でも悪かったんですか」

将は顔をそむけた。あまりじろじろ見られると偽者だとバレるかもしれない。

「ああ……。ちよつとな」

「青山墓地で俺を助けてくれたときの怪我ですか」

若者がいったので、将はふりむいた。良に助けられたという自転車部隊のメンバーはこの男のようだ。

「どうしたんです？ 忘れたんすか。頭を打ったとか。俺ですよ、ヒデトです」

「そうか、ヒデトだったな」

「本当に、大丈夫っすか」

ヒデトと名乗った若者は自転車を降り、将の顔をのぞきこんだ。

「まあ、あんまり大丈夫じゃないんだ。その通り、頭をぶつけてき。いろんなことを忘れちゃったよなんだ」

苦肉の策だ。ヒデトの言葉にのっかることにした。

「やっぱり」

ヒデトはいつて息を吐いた。

「そうじゃないかと思っただんです。あんどき墓石にぶつかってたじゃないですか。やべえと思っただんですよ」

「墓石に!?!」

「ええ、北島会のチンピラ投げとばした弾みで。くらっときたって、あとでいってましたもん。でもダメっすよ、こんなところうろろしちゃう。店にくるなって彼女にもいわれてたらしいじゃないすか」

「そうだったけ」

「そうだったじゃないッすよ。ヤバいなあ。もう。そうだ！ マイさんちにいきましようよ。前に『ダナン』いった帰り、いったたじゃないすか。そのホテルの向かいのマンションだって」ヒデトはいつて、将の腕をとった。片手で自転車をひっぱりながら歩きます。よほど良と親しかったようだ。

ヒデトは飛びだしてきた路地の先に将を連れていった。「ダナン」のある通りと平行して走り、外国人観光客向けらしい、こぢんまりとしたホテルが何軒か並んでいる。

「確か、ここっていつてましたよね。あっ」

そのホテルの向かいにある建物を指さしたヒデトが立ち止まった。

黒の革ジャケットにジーンズを着けた「ダナン」の女マネージャーが、建物の前で腕組みしていたのだ。ひどく険しい表情を浮かべている。

「あれマイさんじゃないですか。なんか怒ってるみたいすよ」

ヒデトはいつて、将から離れた。

「マイさん、久しぶりでーす」

ヒデトは手をふった。女は目もくれず、手をふり返した。

「じゃ俺、これで消えますから」

ヒデトはいつて自転車にまたがった。あつという間にその姿は見えなくなった。

女はずつと将をにらんでいる。

「どこいつてた？」

店で見せた表情とはまるでちがう恐い顔で訊ねた。

「どこって、その辺を歩いてた」

「一カ月もか」

「ああ、そっちか。いろいろあつてな」

「いろいろ、何？ 他の女か」

濃い眉が吊りあがっている。

「他の女？ ちがう。ちよつと怪我をしたんだ。頭を打つてさ」

ヒデトにした芝居をつづけることにした。

女の表情が一変した。

「頭の怪我？ 大丈夫？」

とのぞきこむ。ふんわりといい香りがした。香水とは異なるハーブのような匂いだ。

「いや、大丈夫なただけど……」

「病院いつたか？」

「いつた。入院していたんだ」

「なぜ電話してこないの!？」

女の表情が再び険しくなった。

「それが携帯とかをなくして……」

女はまじまじと将を見つめた。

「あなた、少し変だね。何があつた？」